〈青森県史〉の窓

146

①新湯の共同浴場

②２階建だった大湯の共同浴場

（共に昭和戦前期・青森県史編さん資料）

下風呂温泉を取り巻く歴史空間

中園　裕
（県民生活文化課
県史編さんグループ主幹）

風間浦村の下風呂温泉は、温泉郷の規模が小さい割に、大湯、新湯、浜湯など異なる泉源が間近に存在する。

これは全国に数ある温泉郷の中でも珍しいといわれている。「青森県史の窓」の連載で、藩政時代の下風呂温泉について紹介したことがある（中野渡一耕氏執筆）。今回は近代以降の下風呂温泉を取り巻く歴史を紹介したい。

近代以降の下風呂温泉を語る上で大間線の遺構は外せない。現在は海岸沿いに国道279号が通るが、かつては温泉街を貫く道路が国道だった。その旧国道のさらに南側に細い道があり、一部は陸橋になっている。戦時中に建設された大間線の名残だ。敗戦前に完成を間近に建設が中止され、戦後再開の声もあったが、結局鉄道が走ることはなかった。

しかし、大間線の遺構を後世へ伝える要望と、災害時に住民の避難道になるとの理由で陸橋は整備され、2005（平成17）年にメモリアルロードとして生まれ変わった。現在も「女将の会」で清掃に努めるなど、地元で維持管理を継続している。

現在の下風呂公民館付近は大間線の下風呂駅になる予定だった。駅舎は少し高いところにあり、跨線橋を通って下の温泉街に出る。一見普通の地下道で、陸橋の目立つ存在に比べると地味な存在だが、大間線の大切な遺構である。

大間線の遺構と並び、下風呂温泉には大切な建物がある。何を隠そう温泉街の象徴的存在である大湯と新湯の共同浴場だ。湯の泉質が異なるだけでなく、建物の古さが情緒を醸し出し、観光客にも評判が良い。

新湯は何度か建て替えられているが、建物の基本的な形を崩すことなく、良き伝統を継承している。これに対し現在一階建ての大湯は、かつては二階建てだった。二階は祭りのお囃子を練習するなど、集落の人々の活動拠点になっていた。

子どもの入学式など、行事や記念日には大湯や新湯の建物の前で撮影することが多かった。浴場前の広場では盆踊りも開催された。共同浴場は温泉街を象徴する大事な存在だった。温泉旅館でご主人や女将さんたちに話を聞けば、思い出話がたくさん出てくる。

現在、老朽化した共同浴場の改築や移転をめぐり、地元で話し合いが進められている。建物の耐震強化は必要不可欠だが、古い建築物が持つ風情や情緒の大切さも見直されてきている。下風呂で実際に生活する人々と、温泉利用客の思いが反映する対策がとられることを願っている。